

日本IT書紀

076 降伏調印

05 淹滞篇
卷之十 焦土

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第七十六

降伏調印

一

一九四九年に経済安定本部がまとめた「太平洋戦争による我国の被害総合報告書」によると、大日本帝国は一九四一年十二月から四五年八月まで、六百九万五千人の兵力を投入した。

うち死亡および行方不明は二百五十六万五千八百七十八人、負傷は三十二万六千人だとされている。死亡・負傷の割合は実に四二％に達するが、多くは戦闘での死亡・負傷でなく、餓死や病死あるいは自殺的行為によるものだった。

この数字には朝鮮や台湾など大日本帝国の植民地で徴兵された兵士、東南アジア諸国における現地徴用兵および、軍属、一般市民などが含まれていない。第二次大戦による日本側の死者は五百万人を上回ることは間違いない。直接戦費は五百十五億九千万ドル（一ドル＝三百六十円換算で十八兆六千億円）であった。

また終戦時の「国富戦災率」は、船舶の八〇・六％を筆頭に、機械器具三四・三％、建築物二四・六％、諸車二一・九％、家具等二一・六％、水道設備一六・八％などとなっている。ただ港湾・河川は七・五％、鉄道・軌道は七・〇％、橋梁は三・五％と大きな被害がなかった。

これはアメリカ軍が占領後のことを考慮して、施設を温存したためだった。だが船舶の大半が失われたために港湾は機能せず、鉄道は残っていても石炭の欠乏で汽車を走らせることができなかった。

数字から読めないこともあった。

例えば水道設備は全国の大半が川や井戸に依存していた実情からいって、困窮したのは大都市圏に限られた。鉄やアルミニウムの生産量はそこそこにあっても、市民生活に必要な食料品、衣料、肥料、医薬品などの生産設備が壊滅的な被害を受けていた。

また復員省の第二復員局がまとめた全国の戦災死亡者は約四十五万二千人だった。地域別にみると首都圏が約十七万六千人で最も多かった。木造家屋が密集する大都市という特性にねらいをつけて、米軍は焼夷弾による無差別爆撃を集中させた。さらに京浜地帯の工業・港湾施設が標的となった

中部東海地方は約五万二千人、関西は約三万二千五百人

である。中国地方は広島島の十二万九千五百五十八人を筆頭に十四万人強、九州地方は長崎の四万三千三十三人が群を抜いて多かつた。原子爆弾による被災が多くを占めた。

復員省が調査対象にしなかつたのは沖縄県だつた。この時点で沖縄県はすでにアメリカ領に準じる扱いを受けていたということであるらしい。その地では軍人・軍属九万四千三百三十六人（うち沖縄出身・二万八千二百二十八人）のほか一般市民九万四千人、外国籍約一万三千百人が死亡した。

外国籍の死亡者とは米・英軍の戦死者とは限らなかつた。戦前・戦中に日本領とされていた台湾、朝鮮民主主義人民共和国、大韓民国から徴用された人々である。このなかには日本軍「慰安婦」として強制連行・帯同させられた人々も含まれている。

二

占領軍の宿舍手配や警備、復員船の手配、復員兵受入れ態勢の整備などで、官僚機構は一応の機能を果たしていた。また終戦直後に結成された労働組合が五百九団体・三十八万六百七十七人であつたとか、四六年一月の東京における無許可露天商が五万八千二百三十七人であつたという数字

が残っている。このことからすると、行政機能と治安機能はなんとか機能していたらしい。

ただし、外地ではそうはいかなかつた。

中国に進出していた日本軍兵とその軍属に対して、日本の降伏が伝わると同時に報復が始まつた。略奪と陵辱、集団殺戮の悲劇が起こつた。わけても年寄り、女性、子どもが災難を被つた。

ややあつて中国国民党総統の蒋介石がラジオ放送で「報暴以德」（暴に報いるに徳を以てす）と中国全土に向けて訴えた。これが効を奏して、復員が円滑に進められた。これが縁となつて日本政府は蒋介石が亡命した台湾（中華民国）と親密な関係を結ぶことになる。

満州の場合は悲惨だつた。

終戦の詔勅は、日本軍将兵、軍属、入植者たちに届かなかつた。実際、新京に駐屯していたある部隊は八月十六日にも作戦行動を展開し、豪雨の中を公主嶺という町に向かつていた。この部隊が手にしていたのは、兵一人当り小銃が一丁、弾丸が二十五発、手榴弾が二発だつた。

途中、暴徒の賊に襲われ、これを突破する中で数人の兵士が斃れ、あるいは絶望した古参兵が手榴弾で自決した。

それから丸二日間、不眠不休の行軍が続き、ようやく公主嶺たどり着いた。そこで初めて日本が戦争に負けた——負

けを認めた——ことを知った。

八月十九日、この部隊はソ連軍に包囲される中で武装解除となり、しばらく公主嶺の工場跡地で捕虜生活を送ったのち、「日本に送還する」という名目でシベリア行きの汽車に乗せられた。汽車といっても客車でなく貨車である。旧日本兵は家畜と同然の扱いだつた。

同じように計六十九万二千人の旧日本兵がシベリアに送られ、ツンドラの大地の耕作や劣悪な条件での石炭採掘の仕事を強制されることになった。うち一割に相当する約七万人が病氣や飢えで死没している。

余談だが、東側をソ連軍に占領されたドイツはもつと悲惨だつた。正確な数は伝わっていないが、ナチス・ドイツの降伏に伴い、旧ドイツ軍兵士約百万人がソ連領に送られ、強制労働に従事させられたという。

難を逃れた兵士と軍属および、満州に殖民した日本人たちには、長く苦しい逃亡の旅が始まつた。乳飲み子が飢え死にし、幼い子どもたちは父母と生き別れになることもあつた。中国残留孤児の問題が表面化するのには、戦後三十年を経てからである。

家財のすべてを失い、乞食同然になつた避難民の列は、朝鮮半島をさらに南下し、北緯三八度線でアメリカ軍に収容された。そこでは共産圏勢力との対峙が始まつていた。

同じようなことが樺太でも起こつた。

そのころ、日本の占領に当たつてソ連代表のデレビヤンコ中将が釧路と留萌を結ぶ線から北をソ連の統治として、マッカーサーと激しくやりあつていた。

『マッカーサー回想記』は次のように記す。

ソ連は、占領当初から、問題を起こしはじめた。ソ連に北海道を占領させて、けつきよく日本を二つに分けるといふ要求を持ち出したのだ。

(中略)

私は真正面からそれを拒否したが、デレビヤンコ將軍は罵らんばかりの調子で、ソ連はかならず私を最高司令官の職から罷免してみせるとおどし、私が承知しようがすまいが、ソ連軍はとにかく日本に進駐するとまで極言した。

この脅迫めいた発言に対してマッカーサーは言つた。

「もしソ連兵が、一兵たりとも、私の許可なく日本に入つたら、デレビヤンコ將軍も含めて、ソ連代表部の全員を即座に投獄するまでだ」

この劍幕に驚いてデレビヤンコは答えた。

「まったくの話、君ならそれをやつてのけるだろう」
以後、ソ連はこの話題を持ち出すことがなくなつた——

という。これがために日本はドイツや朝鮮半島のように同胞分断の悲劇を味わわずに済んだ。

八月二十九日、ワシントン政府はマッカーサー連合国軍総司令長官を通じて「日本は間接統治とする」旨を東久邇内閣に通達した。日本は連合軍の占領下にありながら、まがいなりにも自分たちの政府を持つことができた。占領軍約三十万人（ピーク時は四十三万人）および、国際赤十字などの上陸と配備が完了したのは、九月末である。

三

ポツダム宣言の無条件受諾、天皇の肉声による「終戦の詔勅」放送があった八月十五日に時を戻す。

東久邇稔彦は明治天皇の弟・久邇宮朝彦の第九子として、一八八七年（明治二十年）京都に生まれた。一九〇六年（明治三十九年）「東久邇宮」家を興し、イギリスに学んだ後、陸軍に入った。

三二年に陸軍中将、三九年に大将と順当に昇進し、四一年十二月に防衛総司令官に就任した。フランスに留学し、皇族きつての自由主義者として知られたことから、一九四一年に近衛文麿が内閣を放り出したとき、彼を首相に擁立する動きがあった。

結果として東条英機を推す木戸幸一の画策でそれは実現しなかった。太平洋戦争末期は反東条の旗色を明らかにし、戦争終結の工作に参加した。彼の主張はソ連と防衛同盟を結び、アメリカやイギリスを牽制しようとする点に特徴があった。

彼が臨時内閣首班だったのはわずか五十日ではない。このために彼の内閣は

「ポツダム宣言受諾後の第一次的処理を担った」と評価される。だが、仮にアメリカ合衆国政府とイギリス政府の利益が一致していれば、もっと長く首相にあった可能性もある。

のち四七年に皇籍を離脱し、一九九〇年に百二歳で没した。歴代首相でただ一人、百歳以上の天寿を全うした人物となった。また彼の死をもって、旧帝国陸海軍の大将はすべて地上から消滅した。

その内閣は、連合国軍総司令部（GHQ）の方針を国民に伝えるスピーカーの役割しか果たさなかった。無条件で降伏した以上、それは止むを得ないことだった。

クーデターやテロがいつ起きても不思議ではない状況の下で、ともかくにも国内の治安を維持した点は評価されるべきかもしれない。旧帝国陸海軍の武装解除、満州、中国、東南アジア、太平洋諸島からの日本人の帰還、降伏文

書への調印、官僚機構の維持・存続および、天皇制の維持など、戦後日本の軌道をかたちづくった。

酷評されるのは大仏次郎、賀川豊彦、児玉誉士夫の三人を「内閣顧問」として迎えたことだった。戦後、一貫して体制批判を貫いた評論家青地晨は次のように厳しく論評している。

大仏は軍国主義から文化国家への脱皮のシンボルで、クリスチャンの賀川はアメリカ人に信用があったので、対米アクセサリーとしてえらばれた。また児玉は戦争中、上海の児玉機関の大親分で、軍につながる実力者であった。大陸で集めた金銀財宝をごっそり持ち帰って地中に埋め、鳩山自由党の創立資金にしたというウワサの人物である。この三人を顧問にした東久邇内閣は、マジジャンにたとえれば大三元内閣みたいなものである。

八月十六日の午前、アメリカ合衆国政府から

「正式な降伏文書を受理するため、連合軍最高司令官の指示する打合わせをなすべき、十分の権限を与えられたる使者をただちに派遣せよ」

という指示が日本に届けられた。

鈴木内閣は総辞職していたし、東久邇内閣はまだ発足し

ていなかった。わずかな時間だったが、日本には政治の空白が生じていた。ただし官僚機構は健在だったので、この通知は通常の外交手続きを経て内閣総理大臣の座すべき机上に届けられた。

前後して連合軍最高司令官のダグラス・マッカーサー（元帥）から、

マニラ市にある連合国軍最高司令部に、日本国天皇、日本国政府、日本軍大本営の名において、降伏条件を遂行するため必要なる諸要求を受理するの権限を有する代表者を、天候の許す限り、八月十七日東京時間の午前八時から十時の間に出發せしめよ

という命令が届けられた。

東久邇内閣は最初の閣議で協議の結果、陸軍中將・川邊虎四郎を全権に、海軍少將・横山一郎を主席随行者とする一計十七名を海軍の輸送機二機で派遣することを決定した。

一行は連合国軍の指示に従って日の丸をペンキで消し、全体を白色に塗装した海軍九六式艦上攻撃機二機に分乗して出發した。

国籍を抹消した日本海軍の輸送機が離陸すると、連合国軍総司令部の指示を受けたアメリカ海軍の戦闘機が護衛に

ついた。日本軍、アメリカ軍ともいまだに臨戦態勢にあつて、連合軍司令部は日本代表団の乗機が撃墜されることを懸念したのである。

二機の九六式艦攻は沖縄の伊江島まで飛び、そこで川邊らはアメリカ軍の輸送機DC4に乗り換えてマニラに到着した。ここで占領軍の先遣隊が八月二十三日に厚木飛行場に進駐することが決まった。

二十日、灯火管制が解除された。

二十七日、大日本言論報国会が解散した。

二十八日、占領軍の先遣隊が神奈川県厚木飛行場に到着した。折から接近していた台風のため、二十三日の予定が遅れたのである。先遣隊は厚木飛行場を旧日本軍から接收するとともに、占領軍総司令部の開設や占領軍の進駐の準備に取りかかった。

三十日、連合軍総司令官であるダグラス・マッカーサーが「バターン」と名付けられた大型輸送機で厚木飛行場に到着した。バターンとは、彼が屈辱を味わったフィリピン戦線の地名に由来している。五つ星の帽子とレイバンのサングラス、片手にコーンパイプという姿でタラップを降りたこの人物が、戦後日本の最高権力者となる。

九月二日午前九時四分、東京湾に停泊するアメリカ軍戦艦「ミズーリ」甲板上で、外務大臣重光葵を全権とする日

本政府代表団が降伏文書に調印した。このときマッカーサーは連合軍最高司令官として最初の「一般命令」を発令した。日本領と太平洋戦争によって日本軍が占領した地域における日本軍と日本の資産および、戦後統治の分担に関するもので、そこには次のように記されていた。

・満州および北緯三八度線以北の朝鮮、サハリン、千島
　　〓 連極東軍最高司令官ワシレフスキー元帥に降伏。

・日本本土および北緯三八度線以南の朝鮮、琉球、フィリピン
　　〓 米太平洋陸軍最高司令官マッカーサー元帥に降伏。

・その他、中国・台湾・北緯一六度線以上の仏印
　　〓 国民政府蔣介石に降伏。

・東南アジア
　　〓 オーストラリア東南アジア軍司令官に降伏。

・太平洋委任統治諸島・小笠原諸島
　　〓 米太平洋艦隊最高司令官ニミッツ大将に降伏。

降伏文書にサインするために宿舎の帝国ホテルを出るとき、重光は秘書官の竹光秀正に、

——ペンを持っているか。と尋ねた。

竹光が万年筆を差し出すと、それをモーニングの内ポケットに収めながら、

「向こうのペンなど使えるかと
と眩くように言った。」

このとき、フランス代表のフィリップ・ルクレールが間違つてオランダ代表の欄に署名してしまった。このためオランダ代表コンラート・ヘルフリッヒはその下のニュージールランドの欄に、ニュージールランド代表のレナード・モンク・イシット空軍中将はしかたなく欄外に署名することになったというエピソードが伝えられている。


~~~~~ 補 注 ~~~~~

日本の分割統治 マッカーサーの反撃にあつて分割統治に失敗したソ連代表のデレビヤンコ中将は、日本占領軍司令部からマッカーサーを排除することをイギリス、オランダ、中国、オーストラリアなどに働きかけた。このことがのちの極東軍事裁判の歪みにつながつていった。

デレビヤンコ Kozma Derjavanko / 1903 ~ 1954。一九二二年、ソビエト赤軍に一兵卒として参加し三六年、モスクワの陸軍大学を出た。第二次大戦ではヨーロッパ戦線でナチス・ドイツ軍と戦い中将に昇進、一九四五年四月以後、対日戦線に転じた。連合軍対日理事会ソ連代表として日本の政府・軍関係者の公職追放、農地改革などを推進した。五〇年に日本を離れ帰国し、退役した。

東久邇稔彦 ひがしくに・なるひこ / 1887 ~ 1990。明治天皇の没後、健康状態が思わしくなかつた大正天皇の後継者問題に関連して、父親の久邇宮朝彦が長く広島に幽閉に近い状態で隔離されていた。そのこともあつて、皇族ながら反体制的な気骨を持つていた。第二次大戦後の東西冷戦をいち早く見抜いていた。著書に『皇族の戦争日記』(一九五七) などがある。

大仏次郎 おさらぎ・じろう / 1897 ~ 1972。横浜に生まれ東京帝国大学を卒業した。外務省に入り翻訳業務に従事しつつ、「鞍馬天狗」で作家としてデビューした。主な著作に『赤穂浪士』『帰郷』『旅路』『天皇の世紀』などがある。一九六四年に文化勲章。本名は野尻清彦であつて、研究社編集部長で天文学者の野尻

抱影(本名「正英」)の実弟でもある。ちなみに「鞍馬天狗」は小説『鬼面の老女』に初めて登場し、以後、連作として一九五九年まで書き継がれた。

賀川豊彦 かがわ・とよひこ / 1888 ~ 1960。兵庫県に生まれ、アメリカのプリンストン大学を出て一九一七年に帰国した。中学時代にキリスト教の洗礼を受け、路傍伝道を行うなど宗教者としての活動を通じて貧民層の救済に従事した。一九一九年発足の「関西労働同盟」で理事長を務め、川崎・三菱神戸造船所の労働争議を指導した。第二次大戦後、勅選議員隣、日本社会党の結党に参加した。川崎・三菱神戸造船所の労働争議のとき、労働組合と関西労働同盟事務局の間をつなぐ連絡係が大宅壮一だった。

児玉誉士夫 こだま・よしお / 1911 ~ 1984。福島県に生まれ国家主義者として頭角を現した。一九三一年、大蔵大臣・井上準之助の暗殺を計画して検挙されたのち満州に渡つて陸軍参謀本部の嘱託となつた。第二次大戦中は海軍航空本部の委嘱で中国における物資調達や宣撫工作に従事し、その組織は「児玉機関」と称された。第二次大戦後、A級戦犯に指名され、五一年公職追放解除となり、以後も政財界の黒幕的存在として力を持った。ロッキード事件で田中金脈の中核的な人物としてクローズアップされた。逮捕ののち裁判中に没した。

青地 晨 あおち・しん / 1909 ~ 1984。富山県に生まれ佐賀県で少年期を過ごした。一九三八年、中央公論社に入り、編集次長。四四年に横浜事件に連座して逮捕され拷問ののち虚偽の自白をしたことが生涯の大きな負い目となった。四五年十月、世界評論社を興して編集長、五〇年に評論家として自立した。大宅壮一と親交を結び「ノンフィクション・クラブ」世話人。一九七

三年に起こった韓国大統領候補者金大中拉致事件をきっかけに日韓連帯連絡会議を主宰し、以後、冤罪問題に取り組んだ。著書に『魔の時間』『冤罪の恐怖』などがある。

**マッカーサーのコーンパイプ** 第一次大戦のヨーロッパ戦線で初めてコーンパイプを手にした写真を撮影し、以後、位が上がるたびにパイプを大きく、より目立つようにした。ヘビースモーカーであることは、当時の陸軍兵士から尊敬を受ける条件だったからだが、マッカーサーはタバコを吸わなかった。

**戦艦「ミズーリ」** 全長約二百七十メートル、全幅約三十三メートル、排水量四万八千五百トンのアイオワ級三番艦で、一九四一年一月に就役し四五年四月の沖繩上陸作戦に参加した。同年七月十三・十四日には北海道室蘭の製鉄所、十七・十八日には茨城県日立市の工業地帯を砲撃し、八月二十九日東京湾に入った。

降伏文書の調印に使われたのは、大統領トルーマンの出身地にちなんでいた。同時に陸上だと方が一、帝国陸軍の反乱兵が調印を邪魔するかもしれないと懸念した、という説がある。

のち朝鮮戦争に参加し五年に退役したが八六年に再就役して九一年湾岸戦争の支援活動に従事した。ちなみに降伏調印式のとき、砲台に飾られていたのはマシュー・ペリー提督が徳川幕府と日米和親条約を結んだときのものであった。

**重光 葵** しげみつ・まもる／1887～1957。大分県に生まれ一九一一年東京帝国大学法科を卒業して外務省に入った。三年、中国公使となり、三二年四月、爆弾テロで片足を失った。三三年から三六年まで外務大臣・広田弘毅の下で次官を務め、以後、ソ連、イギリスに大使として赴いた。ナチス・ドイツを過大評価する近衛内閣に異論を示し、日独伊三国同盟に反対した。第

二次大戦中は東条内閣、小磯内閣で外務大臣、東久邇内閣でも外務大臣となったが、四六年にA級戦犯に指名され禁固七年の判決を受けた。五二年、改進黨総裁を経て五四年に日本民主党副総裁として鳩山一郎内閣で副総理兼外務大臣を務めた。

**調印式の随員** 重光葵は天皇と大日本帝国政府を代表し、梅津美治郎は大本営陸海軍部を代表した。日本全権随員は陸軍の宮崎周一(中将)、永井八津次(少将)、杉田一次(大佐)、海軍の富岡定俊(少将)、横山二郎(少将)、柴勝男(大佐)、外務省の岡崎勝男(終戦連絡事務局長)、加瀬俊一(内閣情報第三部長)、太田三郎(終戦連絡部長)だった。

また連合国側は連合国代表がダグラス・マッカーサー陸軍元帥、アメリカ合衆国軍はC・W・ニミッツ海軍元帥、中国(中華民国)政府は徐永昌上將軍、イギリス(連合王国)政府はブルース・レーザー海軍元帥、イギリス軍はアーサー・パーシバル陸軍中将、ソ連はクズマ・デレビヤンコ中将、オーストラリアはトーマス・ブレイミー陸軍元帥、カナダはエル・ムーア・コズグレイヴ陸軍大佐、フランスはフィリップ・ルクレル陸軍大将、オランダはコンラート・ヘルフリッヒ海軍中将、ニュージーランドはレナード・モンク・イシット空軍中将だった。

# 日本IT書紀 076 降伏調印

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。